

海外日誌 (二十六)

文部省在外研究員 山本 一 清

九月二十三日(月)

朝八時二十二分、ケードルセー停車場發、スペインに向ふ。途中、レゾーブレで一吋乗り換へ、十時過ぎオルレアンに着。ベテカー案内書をつたよりに、ロワヤル通りを先づジョシ五世橋まで歩いて、市街の模様を見、それからタパール街のジャンダークの家や、マルトロワ廣場や、サンピエール寺、カテドラル等を見物。ついで廣場の一亭で晝食した。——流石に此のまちは到る所「ジャヌダークだらけ」と言ひく程のまちである。街路が狭くて、大市街から來た者には窮屈らしく感じるが、しかし、史蹟に富むフランスの田舎町としてはまづ、標本的のものだらう。人も好い——十三時半、發。二十一時ホルドー着。驛前のホテル・レゾナに入る。

九月二十三日(火)

朝十時、小兩のふる中を、タクシを雇ふて市の郊外フロワレーの天文臺を訪ふ。臺長は不在、兩氏に迎へられ、臺内外を見せられた。古い子午環や、十三時天體寫眞鏡や、十六時眼視赤道儀などが主なものであつたが、觀測者も少なく、經費も不足勝ちで、何となく荒んで見えた。——之れが、自分としてはヨロツバで最初に見た天文臺である。午後は市内見物。電車で并クトワル廣場まで、それから又サン・アンドレのカテドラル、市廳、アンタングダンス通、トルネー通、ガンベタの像、公園、カンコンス廣場、グラランド劇場などを見、夕方宿に歸る。可なり整つた市で、此のホルドーは、殊に美しい公園の靜かな氣分が好かつた。但し、雨の水でガロンヌ河は濁つてゐる。

九月二十四日(水)

朝七時半ホルドー發。學會の日が迫るので、此れ以上の途中下車を

斷念し、マドリドへ急行することにする。窓外、午前中は雨。午後二時、スペイン國境に入り、イェルン驛で税關の検査。それから一等車に乗る。車中、パリイからのカルチエー氏夫妻と知り合ひ、いろ／＼マドリドの豫備知識を與へられた。窓外の景色は、サン・セバステアンまで海が見えたけれど、其の後はヒレニー山脈を越えるので深い山や谷の景色のみであつたが、自分等には之れが亦、久しぶりに見る日本の山の景のやうにも思はれて、眼を喜ばした。——アルザス驛では面白い驛辨當、ミランダ驛ではカフェ。ブルゴスからは何も知らずに車中にねむる。

九月二十五日(木)

早朝七時、汽車はマドリド北停車場着。すぐ馬車でホテル・メトロボリタノに入る。取り敢へず、ホテル・パラスに先着の田中館松山大谷三氏を訪ひ、會議について種々の打ち合はせ——午前中、自分は主に田中館博士と共に木村博士の緯度變化に關する論文をよみ、晝飯をいただいて宿へ歸る。

夕方、また、ホテル・パラスで會議の準備につき。

九月二十六日(金)

朝十時、衆議院に於いて、國際地球學同盟の測地學部會が開かれる。出席者約一百名、十ヶ國が代表されてゐる。日本からは田中館、大谷、松山、山本の四人が代員となる。——先づ部會長ホーリーの開會辭、接待總代としてスペインの地理局長クビヨ氏の歡迎辭あり、次いで代員の點呼、幹事ベリエー大佐の諸報告など、之れで午前中は費えた。午後は四時から開會、代表各國の國別報告が始められ、今日では濠洲からスペインまでの報告がすんだ。次で、當置委員二名を定めて閉會——會議のために、議院の設備全部が開放せられ、スペイン官民一同の厚意が到る所に表はれて、既に今日開會の第一日から、吾々は非常に喜びと満足を感じた。

九月二十七日(土)

開會十時半、午前中は佛英伊の報告、午後は日本からホルトガルま

での報告があつた。國によつて可なりだし、しない報告もあつて、飽きることも稀でないけれど、配布される報告書類には仲々念の入つたものがあり、土産さしても立派なものだと思はれた。會議は殆んど全部フランス語が用ゐられる。英語を用ゐる者は日英米ぐらゐなもの——之れは少々意外であつた。

夜、宿のホテルに水漏れ騒ぎがあり、修繕中、サロンで雜誌などよむ。

九月二十八日(日)

日曜の特別接待さあつて、今日は代表員及び家族一同自動車にのせられ、市の内外を見物した。自分等日本人五人は特に一車を與へられ第一隊に加はつて、先づ王宮からバルド宮殿にまはつて多くの立派なタビを見、お晝にはクエスタ・デ・ラス・ベルデイスのレストラント「カモーラ」で純スペイン式の招待を受け、午後はマドリド市の内外をドライブし、目下建築中の地球學研究所を見、三時半、お待ち兼ねの闘牛場に着。まもなく始まつた此の特有の國戲を見た。闘牛は前後六番、熱叫する滿場の男女と共に、可なり面白いものだと思つた。多くの人々は、牛のみならず、憐れな犠牲となつて斃れる馬に同情して、「殘忍な遊戲だ」罵つたが、自分は「歐洲人の氣質として、之れくらゐの事はやりかねない筈」と思つてゐたから、其の點は餘りに感じなかつた。それよりも、此の闘牛戲そのものが今少し藝術的なものと思つてゐたのに、實は全く殺風景なものであつたことに失望した。しかし、何と言つても、始めて見た此の國戲の印象そのものは強いものであつた——何やかやと、議論などしながら、八時頃、宿に歸る。夜、ソル廣場を散歩して、當地に滞在の中の花見中山兩氏に會ひ、案内されてアルフォンゾ座にスペイン踊りを見に行つた——之れも確かに土産の一つである。

九月二十九日(月)

朝の會にはセルギアからチエクまで五ヶ國代員の報告と、實務委員の撰定あり、午後にはギリシヤ、メキシコ、ポーランドの報告について、部長や幹事の改撰あり、皆留任。

自分は今日經度委員會の委員に擧げられた。御晝の休みに大谷氏及び英子と共に散歩して、アルカラ街に日本公使館を訪ひ、公使廣澤伯爵に面謁し、後レティロ公園を歩いた——マドリド中にある大建築物の美的なこゝロバリと雖も三舍を避けるものが多い。之れは豫想外であつた。

九月三十日(火)

國別報告が昨日を以つて終り、今日は測地學部内の各委員會の報告に移る。今日午前中は測地一般及び三角測量委員會、午後は地形、經度、重力偏差の各委員會あり。最後に、田中館博士の提議により、一百萬分の一の國際地圖速成の決議案通過す。

夜九時、吾々五人は日本公使館に招かれ、廣澤公使より晚餐を頂く。

十月一日(水)

十一時から衆議院の本議場に於いて、いよいよ、國際地球學同盟の第二回總會開會式があり。國王臨御して司式せられ、スペイン側の委員長クビヨ老の歡迎辭、同盟總長ラルマン氏の答辭あり。壯重を極めたものであつた。測地學部以外の各部(地震、氣象、海洋、地磁氣、火山、)も亦今日から部會を開くので、代員の數は俄かに倍加し、一段の賑やかさを増す。

午後六時半からは、又、市廳で大構へなレセプションがあつた。代員も家族も招かれ、まことに晴れやかな社交會であつた。

地球學は天文學と縁の深いものであるから、此の度の會合にも、各國から可なり有名な天文家が代員として出席してゐることは、自分に取つて幸ひである。測地部會の中に既に佛のビグールダン、ラルマンテス、和蘭のナイランド、ポーランドのパナキエキツ、クラゾフスキ、瑞西のゴーチエー、ニータムマ諸氏が居るし、今日は又、英のターナー教授を見た。

十月二日(木)

朝九時より經度委員會、十時よりは大議場で同盟總會。クビヨ、ラルマン兩氏の演説の後、總幹事ライオン氏の報告、會計委員の撰定、

其他、決議提案等多く、午後一時に漸く終つた。終る前、今後の開議の時間割について、各部門に可なり激しい討論があつた。かうした世界的の學者たちと雖も、議事といつたやうな、専門研究以外のことにかけては素人であるヲイ。

午後四時から測地部會のつゞき、水準測量(ラルマン氏)重力(ソレル、マイネツ兩氏)イソスタシー(ホキー氏)の各委員會の報告をきいた。

夕方六時より、英子と共に招かれて、エストラメラ氏夫妻の宿に行き、テイを頂く。英子はエ氏妻若に日本服を着せたりした。此の席にクビヨ老人及びローデ師(トートザ天文臺長)も見えた。スペインの家庭生活は頗る特色があつて面白い。それを見ても、因襲と享樂とで出来てゐる。(その善惡の判斷は別として)

十月三日(金)

今日は遠足日、代員一同、家族同伴で、朝八時アトチャ停車場發の特別列車に乗り、トレドに行く。トレドはスペインの舊都で、此の國御自慢の名所である。自分等日本人は皆、團に加はり、十一時トレド停車場に着いた後、自動車で、アルカンタラ門から城壁を北にめぐり、先づ此まちの市役所内の地震觀測所を見、それからサン・ジアン・デ・ロス・レイ、マリャ・ブランカ、エルミタ・トランシト、サント・トリーメなどの古い寺々を見、ホテル・カステルでは大午餐會に立派な饗應を受けた。午後又カテドラルの外で、アルカザール博物館を見、六時になつて、停車場から又特別列車でマドリドに歸る。一世以來の歴史によつて作られたトレドの町の總ては自分に非常な喜びと驚きとを與へた。將來のスペイン國の運命は自分の知る所でない。しかし文藝復興期前後から近世に至るまで、スペイン國民が貢獻した文化的方面は偉大なるものであつた。其の跡を、自分は今トレドへ來て、眼の前に見る事が出来たことを喜ぶ。自分に取つて、スペインは今日まで全くの謎であつたのだが。

十月四日(土)

朝の測地部會は、九時から經度委員會、十時半から部會總會で、イ

ソスタシー(ホキー氏)と地形學(

氏)の報告があつた。午後三時から、代員及び家族一同ブラード博物館を參觀し、其の後、王立タビエ工場を案内された。

夜は十時から宮中に於いて、國王のレセプションあり。代員及び家族一同盛裝して行く。吾々日本人團は先づ帝國公使館に集まり、廣澤伯の案内で宮殿に參候した。十一時になるさ、いよいよ、王と王妃と皇太子と太后とが出御され、順に各國からの吾々に握手を賜ひ、尙、一言づつ、御談話を賜はつた。日本人としては田中館博士が紹介の勞を取られたが、英子の日本服が御眼にさまり、王も王妃も皇太子も皆それを御賞めになつたのは自分等の光榮であつた。陛下及び殿下の御一巡の後、テイの御饗しを載き、夜半一時頃退殿して宿に歸る。議院休憩室の諸新聞紙は、皆セネガの國際聯盟總會に於いて目下討議中の平和議定書に關する日本代表の主張と齟齬と、其の成功を報じてゐる。

十月五日(日)

今日は一同また北停車場から八時五十分發の汽車に乗せられてエスコリアルの名所を訪問。即ち大僧院の外を、學院博物館、宮殿、王墓、社殿、書庫の順に見、ホテル・レイナ・并クトリアで午餐、其の後カシタ・デアバヨで精細な象牙の浮彫などを見、午後八時マドリドへ歸着。今日の見物も興味は深かつた。トレドを京都とすれば、エスコリアルは奈良か、叡山か。

十月六日(月)

朝十時半から測地學部會。先づ田中館博士の緯度變化に關する報告あり、次いでペリエ大佐は佛國の三角測量事業を報告す。それから懸案の地球形狀問題に關する討議に移り、英米の間に激しい論戰あり。佛のペリエ、瑞典のローゼン、葡のローホ、瑞西のゴチエ諸氏が之を評論したが、決定に至らず。明日また續行となる。

午後一同招かれてマドリド市内にある氣象臺及び天文臺を參觀した。(自分は天文臺のみ)見たところ、天文臺は多く英國クラブ製の機械で、分光太陽寫眞儀や、十四時赤道儀や、六時天體寫眞儀や、四時

子午環など、可なり有力なものを持つてゐた。場所も好い——六時から地理局でテイの會。

夜は十時から、又、招かれて一同王立劇場に行き、素晴らしいオーケストラを聴く。自分等兩人は第二階の一室に英國のヒンクス氏夫妻と同居した。

十月七日(火)

朝十時から測地學部の會。先づゴーチエー氏が緯度委員會の報告をし、それに對して田中館氏の謝辭があつた。それから又、昨日の續きで、地球形狀に關する討論を行はれた。結局、十九對十七の多數で米國側の主張が勝ち、今後、地球の大きさ及び形狀については一九一〇年のヘイフォード氏の數値を採用することに決定した。思ふに、英國側(一八八〇年のタラーク氏の主張には、少々無理もあり、矛盾もあり、又、我が儘もあつて、多くの同情を惹きかされた。

其の後、國際文獻、地形、經度、三角測量、計算表、地殻潮汐、不變金等の諸委員會の報告があつた。

午後には測地、地震、火山三部の聯合會で、ホキー、松山兩氏の報告があつた。

夜九時から、スペイン側の委員たちの招待で、リッ、ホテルに大晚餐會及び音樂會があつた。自分はメランダー、ケーヴ兩氏の間に席を與へられたが、英子は、ヅツミ上席で、ターナー、ホキー兩教授の間に坐して居た。社交會になるさ、さうしても男は女に及ばない。

夜一時半歸宿。

十月八日(水)

今日が會議の最終日。朝九時から測地學部は殘務を片付け、十時からは大議場で同盟總會が開かれた。先づ測地、地震、火山、海洋氣象、地磁氣、各部の報告や決議等があり、それから、次の總會をチエコ國のブラーク市で開くことも決せられた。最後に厳めしい式を以つて閉會。午後は先づ宿で荷作り。次で、公使館とバラス・ホテルを訪問して、暇をひ。夕方には大學の招きに應じてテイを頂く。

十月九日(木)

會議も済んだので、今日は朝九時半アトチャ停車場發の汽車で出發、

東に向ふ。吾々は一米人と同車し、話しつつ、行く。窓の外は一面に砂漠みたいな景色ばかりが続く。

明日トートサへ行く積りのため、今夕九時半レウスで下車、ホテル・デ・ロンドルといふ田舎宿にまゐる。

十月十日(金)

トートサ行きの直行列車を捕へるため、今日は朝八時、レウスの北停車場から地方車にのつてタラゴナに行く。始めてスペインの三等車に乗たが、豚箱同然で氣持のわるいこと!!

時間の都合で、タラゴナに二時間程の餘裕が出来たものだから、市街を散歩した。飾り氣の無い田舎まちで、可なり面白かつたが、二三の店先きに日本製の暖簾が使用されてゐるには、むしろ、驚いた。

十一時タラゴナ發。南行。左窓に始めての地中海を見る。サロウ驛でローテ師が乗り込まれて大に元氣づいた。今行く先きの天文臺の臺長に、かうして同行して貰ふことはご心確かな事は無い——午後一時、いよいよトートサに着き、案内されるがまゝにホテル・シボニに入る。

豫定の如く、午後二時に、マドリドからグレンシアをまはつて來た代員たちの一團が當地に着。やはり客となつて同じホテルの室々に廣くられた。三時半からは此等の國際客團が七台の自動車に分乗して、廣くもない此のまちの所々を見物しまはる。先づカテドラル、後に郊外山手のエゴ天文臺を訪ふ。天文臺はエスイト僧たちの計畫で、ローテ師が臺長、一九一〇年に創立したと言ふから、色んな設備も新式で、可なり財力もあるらしく、器械にしても圖書にしても案外見事である。純天文の方面としては四時の子午環、六時の寫眞用望遠鏡、それからハイカラな分光太陽寫眞儀があつて、地磁氣、地震、氣象などの方面と關連しつつ、太陽活動の研究が此所の特色であるから、自分には殊に興味深かつた。——臺内を一巡して後、圖書室でテイの饗宴があり、臺長の歡迎辭(スペイン語)について、伊、チエコ、佛、英等の各國代員が其れ、の國語で謝辭を述べた。自分は日本語で、やはり、一場の辭を述べ、更に其れを自ら英語に譯したが、喝采された。八時に一同宿へ歸る。——珍らしい泊り客なので、ホテルの門前はワイ——連が多く集つて來て、夜更けまで騒いでゐた。